

生命を大切にする子どもの心を育てる保護者のアプローチと困難感

佐東美緒¹・益守かつき²・中野綾美³・矢野智恵⁴・岡本幸江⁵・今西一實⁶・山崎美恵子⁷

(2009年9月28日受付、2009年12月14日受理)

Approaches and Perceived Difficulties of Parents in Raising Children to Value Life

Mio SATO¹, Kazuki MASUMORI², Ayami NAKANO³, Chie YANO⁴, Yukie OKAMOTO⁵,

Kazumi IMANISHI⁶, Mieko YAMASAKI⁷

(Received: September 28, 2009, Accepted: December 14, 2009)

要 旨

本研究は、幼児期の子どもを持つ保護者が、①生命を大切にする子どもの心がどのように育っていると捉えているのか、②生命を大切にする子どもを育てるために、どのようなアプローチを展開しているのか、③生命を大切にする子どもを育てる中で、どのようなことが困難であると認識しているか、その実態を明らかにすることを目的とした。調査用紙を配布し、209名の保護者から有効回答を得た。データを分析した結果、保護者は、子どもの身近なテレビやゲーム、子どもを取り巻く環境から子どもが受ける影響の大きさを懸念し、子どもの言動にとまどい、理想とする関わりを実行することの困難感を感じながらも、生命の大切さを伝えるために子どもに関わろうとしていた。

“生命を大切にする子どもの心を育てる”アプローチとして、保護者は、《子どもの存在を大切にする》《他者との触れ合いを大切にする》《思いやりの心を育てる》《道徳心を育てる》《生命について教える》《死について教える》《自然との触れ合いを大切にする》《危険回避を教える》を用いていることが明らかになった。

キーワード：生命の大切さ、思いやり、子ども、保護者

Abstract

This study seeks to clarify the actual situation of parents with children in their infancy in regard to whether parents understand how children are raised to value life, what approaches parents take in order to raise children who will value life, and what issues they perceive to be difficult in raising children who will value life.

We distributed questionnaires and received valid responses from 209 parents. Analysis of the questionnaire data revealed that the parents had attempted to engage with their children to convey to them the value of life despite concerns about the considerable impact on them of television, video games and their surrounding environment, and while experiencing uncertainty about their children's language and behavior as well as a sense of concern as to how to realize an ideal relationship.

The study also revealed that the parents used the following approaches to raise children who value life: valuing their children's existence, valuing contact with others, raising their children to be considerate of others, raising their children to have morals, teaching their children about life, teaching their children about death, valuing interaction with nature, and teaching their children how to avoid danger.

Key Word: value of life, consideration of others, children, parents

-
- | | |
|-----------------------------|---|
| 1. 高知女子大学健康生活科学研究科 保健学修士 | Kochi Women's University |
| 2. 高知女子大学看護学部看護学科 准教授 看護学博士 | Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kochi Women's University |
| 3. 高知女子大学看護学部看護学科 教授 看護学博士 | Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kochi Women's University |
| 4. 高知学園短期大学 准教授 看護学修士 | Kochi Gakuen College |
| 5. 埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科 看護学修士 | Saitama Prefectural University |
| 6. 宇部フロンティア大学人間社会学部 教授 文学修士 | Faculty of Humanities and Social Sciences, Ube Frontier University |
| 7. 高知学園短期大学 教授 医学博士 | Kochi Gakuen College |

I. はじめに

近年、わが国における青少年の犯罪の問題は、その数だけを見ると終息しているかのような印象を持つ。しかし、実際には、平成20年に刑法犯（交通業務を除く）として検挙された中学生は28,225名、高校生は36,200名に上る。14～19歳までの殺人、強盗、放火などの凶悪犯は956名¹⁾であり、連日のようにメディアで報道されるのが現状である。また、自殺者は19歳以下が611名で、家庭の事情や学校問題によって、自らの命を絶っている²⁾。子どもを取り巻く深刻な問題は、子どもが「死についての認識」や「生命の尊厳性」などを軽んじる風潮が影響していると考えられる³⁾。

“生命を大切にする子どもの心”を育てる過程には、「思いやり」を育てることが必要であり、その行動を説明する際、心理学領域では、向社会的行動（＝愛他的行動⁴⁾）を用いて説明する^{4)～7)}。幼児期における愛他的行動は、生活経験や訓練によって学習され⁴⁾、動機付けの過程で共感性が必要とされる⁴⁾⁵⁾。共感性を支える一番基本的な認知能力は4、5歳頃から急速に伸びることが知られ⁸⁾、幼児期から共感性を育む関わりが重要と becoming くる。

以前、家庭では“生命を大切にする子どもの心”を育てることが、日常生活の中で行われてきた。しかし、近年の少子化、核家族化、社会情勢の変化に伴い、家族機能は低下し⁹⁾、家族のみで“生命を大切にする子どもの心”を育てることが難しい現状がある。

以上のことから、“生命を大切にする子どもの心”を育てるための取り組みは、幼児期から始める必要があり、子どもを取り巻くすべての者が一体となって取り組むべき課題であると言えよう。“生命を大切にする子どもの心”を育てていく上で、小児看護に携わる我々看護者が、専門職として果たすべき役割は、非常に大きいと考えられる。

II. 研究目的

本研究は、現代社会の中で様々な問題を生じて

いる子どもの心に、“生命を大切にする子どもの心”を育てるための、健康教育プログラムを構築する第一歩として、幼児期の子どもを持つ保護者が、①生命を大切にする子どもの心がどのように育っていると捉えているのか、②生命を大切にする子どもを育てるために、どのようなアプローチを展開しているのか、③生命を大切にする子どもを育てる中で、どのようなことが困難であると認識しているか、その実態を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 対象者の選択

A県内の市立保育園、民営保育園及び幼稚園の施設長に対して、研究の目的、研究方法、研究の内容を説明し、調査協力の得られた4施設に通園している幼児を育てる保護者を対象とした。

2. データ収集方法

アンケート調査は自己記載法による4段階のリッカートスケールを用いた。調査内容は、生命を大切にする子どもの心を育てるために、保護者が「子どもを取り巻く社会をどのように捉えているのか」「子どもにどのように関わっているのか」「どのようなサポートを必要としているか」とした。また、生命を大切にする子どもの心を育てる中で、保護者が困難であると認識していること、気をつけていること、工夫、努力していることについては、自由記載による質問を設定した。

了承の得られた施設にアンケート用紙を郵送し、対象者には、回答後、無記名で返送していただいた。調査期間は平成13年2月から7月であった。

3. データ分析方法

統計パッケージSPSSを用い、記述統計にて分析した。自由回答で記載された質的データについては、KJ法により分析した。分析には、看護学を専門とする研究者6名と教育学・心理学を専門

とする研究者1名が参加した。

4. 倫理的配慮

施設長に対して、文書、および、口頭で研究の趣旨を説明し承諾を得た。承諾を得た施設の保護者に対しては、①本研究で得た情報は、本研究以外の目的で使用するは一切ないこと、②調査結果は無記名で回収し、個人が特定できないように処理を行い、専門の学会、学術雑誌に公表することがあること、③研究に協力しない場合でも、不利益を被ることがないこと、④研究への参加は任意であることを文書で説明し、アンケートを配布した。

IV. 結果

1. 対象者の特徴

350名の保護者にアンケート用紙を配布し、209名より有効回答を得た(回収率59.7%)。年齢、続柄、子どもの人数、家族形態、就業状況は表1のとおりである。

表1. 対象者(保護者)の背景

		対象者数	(%)
年齢	20~24歳	8	(3.8)
	25~29歳	35	(16.7)
	30~34歳	89	(42.6)
	35~39歳	60	(28.7)
	40~44歳	14	(6.7)
	45~49歳	3	(1.4)
続柄	母親	203	(97.1)
	父親	6	(2.9)
子どもの人数	1名	103	(49.3)
	2名	86	(41.1)
	3名	19	(9.1)
	不明	1	(0.5)
家族形態	両親と子ども	138	(66.0)
	片方の親と子ども	20	(9.6)
	拡大家族	51	(24.4)
仕事	している	181	(86.6)
	していない	28	(13.4)

2. 保護者が捉える子ども観(表2)

保護者が[昔の子ども]に多いと感じているのは、「五感を活用しながら思いっきり遊ぶ」135名(64.9%)で、この項目で[最近の子ども]に多いと感じている保護者は3名(1.4%)であった。

これに対し、保護者が[最近の子ども]に多いと感じていることは、「突然、大声・奇声をあげる」117名(57.1%)、「暴力を振るい出したら止まらない」110名(55.3%)、「子ども同士で遊ぶ時間より一人であることが多い」153名(74.3%)、「子ども同士であるより大人といることを好む」104名(52.3%)であった。一方、[昔の子ども]に多いと感じていた「集団で行動するときに友達の立場にたって考える」66名(32.2%)、「他人と関わり合っているときにしっかりと目を合わせる」82名(39.8%)、「昼食やおやつの時に座って食べることができる」81名(39.1%)の項目に対して、昔も今も変わらないと感じていた保護者はそれぞれ137名(66.8%)、121名(58.7%)、124名(59.9%)と過半数を占めていた。また、「楽しかったこと・悲しかったことなど感情を相手に伝える」では、昔も今も変わらないと感じている保護者が160名(77.7%)であった。

保護者の多くが「五感の活用」「思いっきり遊ぶ」といった感覚・情緒的な側面の項目が[昔の子ども]に多かったと感じている。「友達の立場に立つ」「他人と関わる時に目を合わせる」「座って食べる」といった、他者との関係性や、子どもの落ち着き、「感情を相手に伝える」ことに関しては、保護者は、昔も今も変わらないと感じているが、「突発的な行動」「自制のきかない行動」など、感情や行動のコントロールがきかないことや「一人で過ごす」「大人と過ごす」といった子ども同士での関係性が希薄になっていることを[最近の子ども]の特徴と感じていた。

3. 保護者の捉える子どもを取り巻く環境

1) 子ども同士の関わる場や機会について

子ども同士が関わる場や機会について、保護者が、「かなりそうである」「ややそうである」「そうである」という肯定的な回答をしていたのは、「子ども同士だけで安心して交流する場がある」146名(69.9%)、「子ども同士で問題解決する機会がある」156名(74.7%)、「地域の中で異年齢

表2. 保護者が捉える子ども観

質問項目	最近の子どもに多い	昔も今も変わらない	昔の子どもに多い
集団で行動するときに友達の立場にたって考える	2名 (1.0%)	137名 (66.8%)	66名 (32.2%)
楽しかったこと・悲しかったことなど感情を相手に伝える	12名 (5.8%)	160名 (77.7%)	34名 (16.5%)
五感を活用しながら思いっきり遊ぶ	3名 (1.4%)	70名 (33.7%)	135名 (64.9%)
他人と関わり合っているときにしっかりと目を合わせる	3名 (1.5%)	121名 (58.7%)	82名 (39.8%)
昼食やおやつの時に座って食べることができる	2名 (1.0%)	124名 (59.9%)	81名 (39.1%)
突然、大声・奇声をあげる	117名 (57.1%)	86名 (42.0%)	2名 (1.0%)
自分より弱い者をいじめ	88名 (43.3%)	113名 (55.7%)	2名 (1.0%)
暴力を振るい出したら止まらない	110名 (55.3%)	88名 (44.2%)	1名 (0.5%)
子ども同士で遊ぶ時間より一人でいることが多い	153名 (74.3%)	53名 (25.7%)	0名 (0.0%)
子ども同士でいるより大人といることを好む	104名 (52.3%)	90名 (45.2%)	5名 (2.5%)

の子どもとの交流を持つ機会がある」148名(70.8%)が約7割であった。一方で、約3割の保護者が“そうでない”と答えており、必ずしも子ども同士の関わる環境があるとは言えない現状がある。

2) 生命を大切にすることの育ちを支える環境

子どもの育ちを支える環境についての問いで肯定的な回答をした保護者は、「子どもなりに思考しながら創作する機会がある」194名(92.9%)、「人との関係の中で子どもの善悪が発達している」188名(90.0%)、「子どもが思いっきり身体を動かせる機会がある」195名(93.2%)、「子どもが思いっきり体を動かせる場所がある」174名(83.3%)、「子どもの周囲でどのようなことが起こっているのかを知らせる機会がある」168名(80.4%)であった。子どもが内面的に成長していくための環境があることが伺える。

4. 保護者の子どもへの関わり

保護者が生命を大切にすることの育ちを支えるために、どのような関わりを行っているのかにつ

いて、以下のような結果を得た(表3)。

1) 子どもと生命のふれあいを大切にすること

【子どもと生命のふれあいを大切にすること】について、約30%の保護者は、「動物や植物など自然とのふれ合いを通して生命を実感できるように関わる」「動物や植物の成長を子どもが見ることができるように関わる」に“かなりそうである”と回答していた。「死んだ生き物にも触れ、生命の終わり(死)を体験できるように関わる」については、“かなりそうである”39名(19.0%)、“ややそうである”58名(28.3%)、“そうである”70名(34.1%)と回答し、38名(18.5%)が“そうでない”と回答していた。これらのことは、子どもと生命のふれあいを大切にすることの保護者の関わりにおいて、“死”よりも“生”への関わりが多い傾向にあることを示している。

2) 生命に関わる子どもの社会化を行う

【生命に関わる子どもの社会化を行う】について、「生命を大切にすることの態度を子どもに示す」は、“かなりそうである”76名(37.1%)、“ややそうである”68名(33.2%)、“そうである”55名(26.8%)、“そうでない”6名(2.9%)と、多くの保護者が、程度の差はありながらもモデル的な関わりをしていた。「お葬式など生命の終わり(死)に関わる社会の行事を子どもに教える」、「子どもに生命が永遠のものではないことについて折を見て話をしていく」では、それぞれ、“かなりそうである”42名(20.7%)、48名(23.3%)、“ややそうである”57名(28.1%)、56名(27.2%)、“そうである”74名(36.5%)、79名(38.3%)、“そうでない”30名(14.8%)、23名(11.2%)であった。また、「子どもに生命の誕生について話す」という項目についても、“かなりそうである”と回答した保護者は61名(29.9%)であり、“そうでない”と回答した保護者は14名(6.9%)であった。【生命に関わる子どもの社会化を行う】中で、“誕生”や“死”についても関わっている保護者が多いということが明らかになった。

表3. 保護者の子どもへの関わり

質問項目	かなり そうである 名(%)	やや そうである 名(%)	そうで ある 名(%)	そうで ない 名(%)	
子どもと生命の触れ合いを大切に する	動物や植物など自然との 触れ合いを通して生命を 実感できるように関わる	63 (30.6)	79 (38.3)	62 (30.1)	2 (1.0)
	動物や植物の成長を 子どもが見ることができ るように関わる	64 (31.4)	70 (34.3)	64 (31.4)	6 (2.9)
	死んだ生き物にも触れ、 生命の終わり(死)を 体験できるように関わる	39 (19.0)	58 (28.3)	70 (34.1)	38 (18.5)
生命に関わる子ども の社会化を行う	生命を大切に する態度を 子どもに示す	76 (37.1)	68 (33.2)	55 (26.8)	6 (2.9)
	お葬式など生命の 終わり(死)に関わる 社会の行事を 子どもに教える	42 (20.7)	57 (28.1)	74 (36.5)	30 (14.8)
	子どもに生命が 永遠のもの ではないこと について折 を見て話を していく	48 (23.3)	56 (27.2)	79 (38.3)	23 (11.2)
	子どもに生命の 誕生につ いて話す	61 (29.9)	56 (27.5)	73 (35.8)	14 (6.9)
生命の大切さを 教える	子どもに生命は ひとつしか なく、大事 なもので あることを 伝える	130 (63.4)	34 (16.6)	40 (19.5)	1 (0.5)
	子どもの日常 生活の中 で危ない ことは何 かを教 える	137 (66.8)	35 (17.1)	33 (16.1)	0 (0.0)
	子ども自身 や友達 の成長 を子ども と共に喜 ぶ	87 (42.4)	58 (28.3)	58 (28.3)	2 (1.0)
健康の大切 さを教える	身体を動か す機会を 作るよう にしてい る	65 (31.7)	67 (32.7)	68 (33.2)	5 (2.4)
	健康を守る ための生 活習慣を 教える	66 (32.0)	62 (30.1)	75 (36.4)	3 (1.5)
	健康の大切 さを教 える	74 (36.1)	57 (27.8)	70 (34.1)	4 (2.0)
思いやり・ 共感性を 育む	子ども同 志がトラ ブルを抱 えたとき 、一緒に 解決策を 考える	53 (25.7)	73 (35.4)	71 (34.5)	9 (4.4)
	子どもが 他の子 どもに 関心を 持つて いるこ とを大 事にする	85 (41.5)	58 (28.3)	60 (29.3)	2 (1.0)
	子どもが 自分の 気持ち を他の 人に伝 えるこ とを促 す	76 (37.4)	67 (33.0)	55 (27.1)	5 (2.5)
	他の人の 気持ち を子 どもが 感じ 取れる ように 関わる	65 (31.7)	68 (33.2)	70 (34.1)	2 (1.0)
生命を 大切に するこ の育ち を支 える	子どもの よいと ころを ほめる	109 (52.9)	57 (27.7)	40 (19.4)	0 (0.0)
	子どもの やる気 を尊重 する	90 (43.7)	62 (30.1)	54 (26.2)	0 (0.0)
	子どもの 共感性 を引き 出す声 かけを する	46 (22.5)	70 (34.3)	81 (39.7)	7 (3.4)

3) 生命の大切さを教える

【生命の大切さを教える】について、“かなりそうである”と回答した保護者は「子どもに生命はひとつしかなくて、大事なものであることを伝える」130名(63.4%)、「子どもの日常生活の中で危ないことは何かを教える」137名(66.8%)、「子ども自身や友達成長を子どもと共に喜ぶ」87名(42.4%)であった。

【生命の大切さを教える】については、それ以外の関わりに比べ、“かなりそうである”と答えた保護者が多くみられた。生命を大切に子どもを育てるために、一つひとつの生命の大切さや、子ども自身の生命を大切にすることを、日々子どもとの関わりの中で伝えていく保護者の姿が浮かび上がってくる。

4) 健康の大切さを教える

【健康の大切さを教える】では、「身体を動かす機会を作るようにしている」65名(31.7%)、「健康を守るための生活習慣を教える」66名(32.0%)、「健康の大切さを教える」74名(36.1%)の保護者が“かなりそうである”と回答していた。これらの関わりに“そうでない”と答えた保護者はそれぞれ5名(2.4%)、3名(1.5%)、4名(2.0%)であった。子どもの健康を守り育てていく保護者の中に、健康の大切さを教える関わりを“そうでない”と回答した保護者がいることは、注目すべき点である。

5) 思いやり・共感性を育む

【思いやり・共感性を育む】については、85名(41.5%)の保護者が「子どもが他の子どもに関心を持っていることを大事にする」に“かなりそうである”と回答していた。また、「子どもが自分の気持ちを他の人に伝えることを促す」、「他の人の気持ちを子どもが感じ取れるように関わる」には、それぞれ76名(37.4%)、65名(31.7%)の保護者が“かなりそうである”と回答していた。これらに“そうでない”と回答した保護者は2名(1.0%)～5名(2.5%)であった。子ども同士のトラブルに関して、「子ども同士がトラブルを

抱えたとき、一緒に解決策を考える」では53名(25.7%)の保護者が「かなりそうである」と回答しており、9名(4.4%)の保護者が「そうでない」と回答している。

これらのことから、【思いやり・共感性を育む】保護者の関わりは、子ども同士の中に保護者自身が入って一緒に何かをするというよりは、自分の子どもに、伝えたり促したりするという特徴があると言える。

6) 生命を大切に作る心の育ちを支える

【生命を大切に作る心の育ちを支える】については、「子どものよいところをほめる」、「子どものやる気を尊重する」にそれぞれ109名(52.9%)、90名(43.7%)の保護者が「かなりそうである」と回答し、「そうでない」と回答した保護者はいなかった。また、「子どもの共感性を引き出す声かけをする」にも46名(22.5%)の保護者が「かなりそうである」と回答していた。保護者は、生命を大切に作る子どもの心を育てるために、子どもの豊かな心の育ちを支援していることがわかる。

5. 保護者が必要としているサポート (表4)

1) 育児相談

「育児相談に応じてもらうことを必要としている」に「かなりそうである」「ややそうである」「そうである」と回答した保護者は119名(56.9%)で、「そうでない」は86名(41.1%)であった。また、育児へのアドバイスの必要性については、「育児へのアドバイスを必要としている」に「かなりそうである」「ややそうである」「そうである」と回答した保護者は149名(71.3%)で、「そうでない」は55名(26.3%)であった。育児相談や育児へのアドバイスを6割から7割の保護者が求めていることが明らかにされた。

「自分が困難に思っていることを一緒に解決していく関わりを必要としている」に「かなりそうである」と回答した保護者は36名(17.2%)、「ややそうである」は61名(29.2%)、「そうである」

は69名(33.0%)、「そうでない」は36名(17.2%)であった。

以上のことより、保護者は、子どもを養育していく過程において子どもに生命の大切さを伝えるために、相談や育児へのアドバイスを必要としているとともに、保護者が子どもを養育していく中で困難な出来事に直面したときに一緒に考え、何らかの解決策を提示するなどのサポートを必要としていることが明らかになった。

2) 子どもの園での様子の伝達

「園での子どもの様子を知りたい」に「かなりそうである」と回答した保護者は97名(46.4%)、「ややそうである」は40名(19.1%)、「そうである」は68名(32.5%)であった。「そうでない」と回答した保護者が3名(1.4%)であったこと

表4. 保護者が必要としているサポート

質問項目	かなりそうである名(%)	ややそうである名(%)	そうである名(%)	そうでない名(%)	無効名(%)
自分が安心できるような関わりを必要としている	52 (24.9)	55 (26.3)	67 (32.1)	26 (12.4)	9 (4.3)
育児相談に応じてもらうことを必要としている	9 (4.3)	47 (22.5)	63 (30.1)	86 (41.1)	4 (1.9)
園での子どもの様子を知りたい	97 (46.4)	40 (19.1)	68 (32.5)	3 (1.4)	1 (0.5)
育児へのアドバイスを必要としている	16 (7.7)	56 (26.8)	77 (36.8)	55 (26.3)	5 (2.4)
自分の気持ちを尊重してもらえ関わりを必要としている	19 (9.1)	58 (27.8)	77 (36.8)	50 (23.9)	5 (2.4)
自分の育児を尊重してもらえ関わりを必要としている	17 (8.1)	55 (26.3)	66 (31.6)	65 (31.1)	6 (2.9)
自分が困難に思っていることを一緒に解決していく関わりを必要としている	36 (17.2)	61 (29.2)	69 (33.0)	36 (17.2)	7 (3.3)
他の保護者との交流の場が持てるような関わりを必要としている	25 (12.0)	64 (30.6)	74 (35.4)	37 (17.7)	9 (4.3)

からも、ほとんどの保護者が子どもの様子を知らなりたいと思っていることが明らかになった。子どもの様子を知らなりたい理由の一つではないと考えられるが、生命を大切に育てる子どもの心を育てるために保護者が必要としているサポートについての回答と考えると、保育園の中で多くの人との関わりを通して、子どもの心が豊かに育つ様子を、保護者も共有したいのではないかとと思われる。

3) 保護者自身の安寧

子どもに生命の大切さを伝えるために、保護者が必要としているサポートについては、「自分が安心できるような関わりを必要としている」「自分の気持ちを尊重してもらえ関わりを必要としている」「自分の育児を尊重してもらえ関わりを必要としている」のそれぞれの項目に「かなりそうである」と回答した保護者は52名(24.9%)、19名(9.1%)、17名(8.1%)、「ややそうである」は55名(26.3%)、58名(27.8%)、55名(26.3%)、「そうである」は67名(32.1%)、77名(36.8%)、66名(31.6%)、「そうでない」は26名(12.4%)、50名(23.9%)、65名(31.1%)であった。程度の差はあるが、7～8割の保護者は子どもを育てていく過程で、保護者自身の気持ちや育児を尊重され、安心できるような関わりしてもらいたいと考えている。

4) 他の保護者との交流

「他の保護者との交流の場が持てるような関わりを必要としている」に「かなりそうである」と回答した保護者は25名(12.0%)、「ややそうである」は64名(30.6%)、「そうである」は74名(35.4%)、「そうでない」は37名(17.7%)である。約8割の保護者が、他の保護者と交流する上でサポートを必要としていた。

6. 保護者が感じる、生命の大切さを伝える関わりへの困難感(表5)

保護者が子どもに生命の大切さを伝えようとするとき、《生命の大切さを伝えることの困難さ》《テレビ・ゲームからの悪影響》《子どもの言動への

とまどい》《理想とする関わりの実行の困難さ》《子どもを取り巻く環境》という5つの困難感を抱えていることが抽出された。自由記載の《 》はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリーを示す。

1) 生命の大切さを伝えることの困難さ

保護者は、子どもに生命の大切さを伝える中で、「本人にどんな言い方をしたら理解してもらえるか」「自分の考えをそのまま伝えても、なかなか理解できない。言葉を選んで話しているが、あまり深く話すと恐がらせてしまう」など、年齢に応じた〈説明の仕方(がわからない)〉や、説明内容の〈伝える程度がわからない〉と感じていた。また、「生命の大切さを教えていくことはしているのだが、子どもは言葉だけで理解している様子」「まだ小さいので言葉で『死』を説明しても理解できない」といったように、「生」や「死」に関することを説明するが、子どもに〈説明しても伝わらない〉という思いをもっていた。さらに、「仕事をしていることもあり、子どもと接する時間が少なく、いろいろと子どもに教えたいことはたくさんあるけれど伝えきれていないと自分で感じる事が多くて悩んでいる」というように、懸命に伝えようと努力はしているが、関わる時間の限界から〈伝えきれない〉とも思っていた。一方、年齢が幼いために〈伝えられない〉と考える保護者もみられた。そして、生命を大切にすることの重要性を説明しながらも、保護者自身が虫を子どもの目の前で殺してしまうことや、そのことを子どもから指摘されるといった〈自分自身の言動の矛盾〉も感じていた。このように、保護者は生命の大切さを伝えることそのものに様々な困難を感じていた。

2) テレビ・ゲームからの悪影響

保護者は、テレビやゲームからの子どもへの影響の大きさを懸念していた。例えば、「テレビなどで暴力シーンが当たり前のように放送されていること」「テレビなどで殺されたりする場面を見て、死ということが軽くというか、日常的に扱われているように思う。テレビの影響が大きい」な

表5. 保護者が感じる、生命の大切さを伝える関わりへの困難感

生命の大切さを伝えることの困難さ	説明の仕方がわからない	・具体的な説明の仕方が分からない ・年齢に応じた説明の仕方が分からない ・生命の大切さを伝えることは難しすぎる
	伝える程度がわからない	・どこまで説明していいのかわからない
	説明しても伝わらない	・“生”の大切さを伝えるが伝わらない ・子どもが“死”の説明を理解できない ・子どもの年齢の理解力からの限界がある
	伝えきれない	・関わる時間の限界で伝えきれない
	伝えられない	・年齢が幼いので話ができない
	自分自身の言動の矛盾	・自分も小動物を殺生することがある ・自分の小動物の殺生を子どもに指摘される
テレビ・ゲームからの悪影響	日常的に子どもの目に“暴力”や“死”がさらされる	・過激な暴力シーンを子どもが目にする ・軽い“死”の扱われ方を子どもが目にする
	現実と架空の区別の困難さ	・テレビの世界への入り込む ・テレビの内容を嚙呑みになってしまうことへの懸念
	ゲームからの実際の影響	・“リセット”を覚えたことへの不安 ・ゲームの中で“リセット”を実行する
子どもの言動へのとまどい	子どもの言葉遣いへのとまどい	・悪い言葉遣いをする ・“死”を簡単に口にする
	子どもの乱暴なふるまいへのとまどい	・物を大切にしない態度を示す ・暴力的な態度を示す ・小動物へ殺生をする
理想とする関わりの実行の困難さ	動物飼育の困難さ	・仕事で忙しく動物が飼えない ・住宅事情のため動物が飼えない
	子どもとの触れ合い時間確保の困難さ	・仕事のため子どもと関わる時間が少ない
	“死”に関わる機会のなさ	・死に関わる環境がない
子どもを取り巻く環境	家族関係からの影響への不安	・夫婦関係からの影響への懸念
	望ましい環境の少なさ	・遊び環境の減少 ・身近な自然環境の少なさ
	世相からの影響への不安	・世の中の移り変わりへの不安 ・風潮からの影響への不安

ど、日常的に子どもの目に“暴力”や“死”がさらされることにより、自分の説明が一掃されてしまうのではないかという悩みをもっていた。また、「常にテレビが存在して、現実の世界と違う世界に一日のうち何時間か入り込んでいる」と、子どもの〈現実と架空の区別の困難さ〉から、日常生活の中に悪影響が及ぶのではないかと心配していた。そして、「兄弟がゲームを覚えたことで、何度もリセットがさくのが不安。軽く『生まれて

こんかったらよかった』『死ぬ』と口に出すようになった」と〈ゲームからの実際の影響〉を子どもが受けていることに不安を持っていた。

このように保護者は、生命を大切にする子どもの心を育てる上で、“暴力”や“死”が簡単に表現されるテレビやゲームが子どもに与える影響の大きさを懸念し、できるだけ子どもから遠ざけたいと願っていた。

3) 子どもの言動へのとまどい

保護者は、「3歳の長男は、おもちゃの刀を持って『これで首をぐさっと切るぞ』などと恐ろしい言葉をよく言う。テレビで見ることと現実の区別がまだ付かないとは思いますがちょっと怖い。『そんなこと言われんよ』と注意はするが、具体的にどう言っているのか、とまどうことがある」「『死んでもいい』自分のことや親のことを、このように平気で言うことがある。救急車を見ても『死んだ人が乗ってるの?』何度説明してもこう言う。親とすれば“死ぬ”なんて言葉を平気で使ってもらいたくないが、なかなか難しい」と、“死”を簡単に口にするなど、〈子どもの言葉遣いへのとまどい〉を感じていた。また、「人や動物に乱暴したりはしないが、おもちゃ等、物を大事にしないのが気になる」「今現在、生命というほどのものではないけれど、子どもがかなり暴力的なので、少し心配している」「蟻や虫を、かまれると痛いからと言いながら平気で踏みつぶす。それも楽しそうに」と物や人、虫に対する子どもの態度を見て、〈子どもの乱暴なふるまいへのとまどい〉を感じている保護者も見られた。

このように保護者は、生命を大切にする心を育てたいと願い、そのように関わっているにも関わらず、子どもから発せられる言葉や態度にとまどっていた。

4) 理想とする関わりの実行の困難さ

保護者は、「動物を飼いたい、仕事を持っているためにできない」「現在マンションなので動物が飼えない」というように、仕事の多忙さや住宅事情で〈動物飼育の困難さ〉を感じていた。そ

して、「仕事をしているので、毎日子どもと散歩して自然と触れ合うということができない。1週間に1度程度のふれあいで、子どもに伝わるか？」と、〈子どもとのふれあい時間確保の困難さ〉も感じていた。また、「身近な環境の中で死に関わる機会がまだない」というように、「死」に関わる機会のなさを感じていた。

このように保護者は、生命の大切さを伝えるために、理想とする関わりを持っているにも関わらず、諸事情により実行できない困難さを感じていた。

5) 子どもを取り巻く環境

保護者の中には、「あまり仲の良い親のモデルとなっていないことが、子どもの心にどのような影響を与えるのかが気になり」「やっぱり両親が仲良くしていないといけないと思う。上の子はすぐ私達のことを心配し、様子も変わってきたりする」と、〈家族関係からの影響への不安〉をもっている者がみられた。また、「昔のように、車の進入不可能な小道や空き地がなくなり、子ども同士で外で遊ぶ環境が減ってきた」「昔と違って周りに自然がないので、連れて行って自然を楽しむことしかできないので、子どもは珍しいぐらいにしか思っていない。結局そういうところへ連れて行くこともなかなかないので、自然の恐ろしさや危ないことを身をもって覚えることは難しい」というように、遊ぶ環境の減少や身近な自然の少なさなど〈望ましい環境の少なさ〉を感じていた。そして「めまぐるしく移りかわってゆく世の中についていけない」「社会全体がものを大切にしない、生命を大切にしない。(そのような状況を)あちこちで見ることがあり、子ども達は戸惑いを感じることはないか」と、子どもが周りの社会環境から影響を受けるのではないかと〈世相からの影響への不安〉を感じていた。

このように保護者は、家族や周りの環境、社会の風潮など、子どもを取り巻く環境に対し不安や悩みを持っていた。

保護者は、子どもの身近なテレビやゲーム、子

どもを取り巻く環境から子どもが受ける影響の大きさを懸念し、子どもの言動にとまどい、理想とする関わりを実行することの困難感を感じながらも、生命の大切さを伝えるために子どもに関わろうとしていた。

7. 生命の大切さを伝えるために保護者が用いたアプローチ（表6）

保護者の中には「特に思いあたらない」「特に何もしていない」等、回答していたケースもあったが、全体的には“こういう子どもに育ててほしい”というメッセージが込められていた。保護者は《子どもの存在を大切にする》《他者との触れ合いを大切にする》《思いやりの心を育てる》《道徳心を育てる》《生命について教える》《死について教える》《自然との触れ合いを大切にする》《危険回避を教える》ことを通して、子どもに生命の大切さを伝えようとしていることが明らかになった。

1) 子どもの存在を大切にする

保護者は、〈子どもを受け止める〉〈子ども自身の存在を大切にする〉という、《子どもの存在を大切にする》関わりを通して、子どもに生命の大切さを伝えようとしていた。

例えば、「なるべく自分の感情は出さず子どものその時の気持ちを理解してから是は是、否は否で話をするよう努力をしている」「いつでも子どもが一番の味方であることを子どもに伝え、子どもが悩みを抱えた時に、気軽に相談できるように、日頃から学校や保育園での出来事(楽しかった事、嫌だった事)をよく聞いてあげる」など、子どもの思いをそのまま受け止めようとしていた。また、「『○○ちゃんは、パパとお母さんの大切な子どもよ』『大好きよ』と抱いたり、つねに声をかけている」「まだ小さいので、とにかくまず子ども自身が大切にされているということを実感できるように心がけている。きちんとしっかり、目と目を合わせて話し、笑いかけること、語りかけること、スキンシップなど。自分が大切にされたら、

表6. 生命の大切さを伝えるために保護者が用いたアプローチ

子どもの存在を大切にしている	子どもを受け止める	・子どもの思いを受け止める
	子ども自身の存在を大切にしている	・子ども自身の存在の大切さを伝える ・自分自身を大切にするように伝える
他者との触れ合いを大切にしている	子どもと家族の触れ合いを大切にしている	・子どもとの関わりを心がける ・親子のつながりを大切にしている ・大家族のつながりを大切にしている
	人との触れ合いを大切にしている	・他者と関わりをもつ遊びを推奨する
思いやりの心を育てている	人の存在を大切にしている	・人は皆価値ある存在であることを伝える
	他者への思いやりの心を求める	・他者への思いやりの心を子どもに求める ・困っている人への関わりを促す
	他者の立場に立って考えるように促す	・相手の立場を自分におきかえ考えさせる ・きょうだいみんなの成長の大切さを教える
	物を大切にすることを教える	・生き物以外の物でも大切に扱うことを教える ・食べ物大切にすることを教える
道徳心を育てている	悪いことはやめさせる	・悪い言葉を注意する
	何がいけないことを教える	・悪いことの理由を説明する ・人に対して心身共に傷つけてはいけないことを教える
	暴力シーンを回避する	・暴力シーンや残酷な場面を見せない
	暴力以外の解決を促す	・暴力以外の方法で解決するように教える ・口で説得するように教える
生命について教える	生命の誕生に触れる機会をもつ	・産科の検診に連れて行く ・生命の誕生にまつわる話をする
	生命の概念を教える	・生命について話をする
	生命に対する姿勢を教える	・生き物の大切さを教える ・生命を大切に扱うことを示す ・関わり方で生命が尽きることを教える
	身体のしくみを教える	・身体づくりや生理的現象を説明する
死について教える	死の概念を教える	・死について説明する ・死の不可逆性を教える ・生命の有限性を教える
	死に対する姿勢を教える	・死の重大さを態度で示す ・死の悲しさを伝える ・亡くなった人を敬う姿勢を教える
自然との触れ合いを大切にしている	自然と触れ合う体験をさせる	・動植物など自然とふれ合う機会をもつ
	動植物の飼育を楽しむ	・小動物の飼育をする ・小動物の飼育での楽しみ・喜びを子どもと一緒に感じる
危険回避を教える	事故の危険性を説明する	・なぜ危ないかを説明する ・ルールを守ることの大切さを説明する
	事故から子どもを守る姿勢を見せる	・外に出るときは必ず手をつなぐ
	交通事故でどんな思いをするかを話す	・交通事故で亡くなるとみんなが悲しいことを伝える

他の人、物も大切に出来ると思うから」など、子ども自身の存在を大切にしたい関わりを持とうとしていた。

このように保護者は、子ども自身が大切にされていることを実感できるように、また、一人ひとりの子どもの存在が大切であるということを実感できるように、言葉や態度で子どもに伝えていた。

2) 他者との触れ合いを大切にしている

保護者は、〈子どもと家族の触れ合い（を大切にしている）〉〈人との触れ合い（を大切にしている）〉を通して、子どもが様々な人との関わりをもてるように《他者との触れ合いを大切に（している）》していた。

例えば、「特に生命というより、しっかりその子どもと関わり、会話をしていくことが大切だと思う。親と子がしっかりつながっていればいろいろな面で間違ったり困ったりした時に自分を見つめ直すことができるのではないかな。少し違うかもしれないが、3世代で生活することはとても大切だと思う」「曾祖母、祖母、祖父、父、私、姉たちというようにいろいろな人の子どもの対する『思い』の中で、感じて成長していけるので、良かったと思っています」「長男のお友達は、もうゲームをしているようですが、そのような物は与えたくないと思っている。『ゲームなら、何人かで遊ぶのどかな双六が一番』というのが、二人の意見」である。

このように保護者は、子どもが家族との触れ合いの中でつながりを感じることを大切であると考えていた。

3) 思いやりの心を育てている

保護者は、生命の大切さを伝えるために、〈人の存在を大切にしている〉〈他者への思いやりの心を求める〉〈他者の立場に立って考えるように促す〉〈物を大切にすることを教える〉ことにより、《思いやりの心を育てている》よう関わっていた。

例えば、「それぞれが大切な存在であることをできるだけ言葉に出す」「自分より小さい子ども達には優しく接すること。体の大きなお友達、元

気すぎるお友達、静かなお友達、障がいのあるお友達、みんな同じ。仲良く遊んで毎日楽しく、ハッピーでと言う」「他人に思いやりを持って接してほしいと思っている。自分がされて嫌なことは人にしたり、言ったりしないように話している。困っているお友達がいたら、助けてあげる気持ちをもってほしいと思っている」「動物や虫のことも、自分におきかえて話をする」「5歳の長男は、時々、2歳の長女、1歳の次男に遊びを邪魔されると、『あっち行って。〇〇くん（次男）はベッドの中』と怒る時がある。『みんな遊びたいし、〇〇くん（次男）は、歩く練習しなきゃいけないから』とお互いの成長を大事にするよう諭す」「いきものだけでなく、おもちゃや、その他いろんなものに対しても、大切に扱うことができるように心がけている」「まだ4歳なので、難しいことは言っても理解できないと思うので、暴力をふるった時などは、自分もそうされたら痛いでしょうと言いつけ強くと注意する」である。

このように保護者は、日頃の関わりの中で、人間の存在の大切さを伝えながら、相手の立場にたち、思いやる心を子どもに求めながら思いやりの心を育てようとしていた。

4) 道徳心を育てる

保護者は、〈悪いことはやめさせる〉〈何がいけないことかを教える〉〈暴力シーンを回避する〉〈暴力以外の解決を促す〉などの関わりを通して、子どもの道徳心を育てようとしていた。

例えば、「友達や弟をたたいたりたたかれたり…という時も、口で説得する事…などと教えるようにしている」「残酷な言葉を発した時はしかる」「せっかく咲いているかわいい花を理由もなくちぎったりした時には注意する」「人を平気で殺すようなビデオ類はなるべく見せない。見てしまっている時は、それがいかに悪いことかを言って聞かせる」「弟をいじめたりしている時には、弱い者（小さい子ども）への接し方、これ以上すると生命に危険があるなどという事を注意する」「人を傷つけたり、また言葉で傷つけて、嫌な思いを

させてしまうような大人にはなってほしくないの、ささいな事でも、悪いことは悪い、どうして悪いかを一緒に考え、教えていきたいと思う」「相手に対し、してはいけないことやけんかをしてもこうやって解決する（暴力でない）事」などである。

保護者は、テレビやゲームなどからの影響を受けた子どもの言動へのとまどいをあげていたが、とまどいながらも、子どもの言動に理由を説明しながらストップをかけたり、原因となっているテレビやビデオを子どもの目に触れないようにするなどしながら、子どもの道徳心を育て、生命を大切に育てようとしていた。

5) 生命について教える

保護者は、〈生命の誕生に触れる機会をもつ〉〈生命の概念を教える〉〈生命に対する姿勢を教える〉〈身体のおもろさを教える〉ことにより、生命とはどのようなものかを教えようとしていた。

例えば、「今妊娠中なので、健診へ連れていっている（エコーを見て実感している様子）」「機会があるたびに子どもの誕生の時の事を話したり、ニュースを題材に命の大切さを話している」「花や木にも生命がある事を話す」「虫探しをして遊んでいる時があるが、つかまえた後も命がある事を知らせ、逃がしてあげるようにしている」「大人が虫を恐がると子どもの意識にも虫はきもちわるいとか動物は怖いと感じると思い、出来るだけ、親が、平気そうなそぶりをするようにしている」「アパートなので、犬や猫はダメなので、カメを2匹飼っているが、エサを子どもにやらせている。食べさせてあげないと死んでしまう、と言うことはまだ分からないと思うが、『カメもお腹がすいているから、エサをあげてね』というと『お腹いっぱい食べてね』と言ってあげている。もう少し大きくなったら自分がエサをあげなければ死んでしまうということを考えてくれるように、生き物を自分が育てているという認識を持たせたいと思っている」などである。

このように保護者は、機会を捉えて生命の誕生

や生命についての話の中から生命とはどのようなものかを子どもに教え、保護者自身が生命のあるものに対してどのような姿勢で関わらなければならないのかを伝えようとしていた。

6) 死について教える

保護者は、〈死の概念を教える〉〈死に対する姿勢を教える〉ことにより、死とはどのようなことを教えようとしていた。

例えば、「虫に興味があるから、死なせてしまった時などは、言葉で教えている」「実家で飼っている犬の母犬が死んだ時『ラン（犬の名）は天国にずーっと登って行ってね、チビ（子犬）のことを見てるのよ』と話してやると『ふーん』と、納得したような感じだった。それから後も時々『ランはお空の上から見てるね』と突然言い出したりして結構印象深かったようだ」「最近の子ども達は、生命はゲームのように思っている。一度死んだらリセットすればまたゲームが出来るように、『人の命も、リセットすればまたいいさ』と思っているのではないか。そのときにははっきり、子どもを見て、命の大切さ『一つしか命はない』ということ、何度も子ども達が口にするたびに言い続けている」「死ぬと言うことについても、機会あるごとに一緒にお墓に生物を埋めたり曾祖母の墓参りに頻回に行ったり。映画やアニメの解説をするなどして、死を不可逆的な喪失であることを伝えていこうとしている」「病気で入院中の曾祖父の見舞いの機会に、病院や病気について話すようにしている」「テレビなどで悲しい出来事（災害や事故）を見聞きしたら、私の感情を抑えることなく、泣きながらでも、こんな事悲しいよね、人の気持ち考えて、心も体も傷ついたらいかんよね、と話したりする」「亡くなった父やおばあちゃんの写真には必ず挨拶をするようにし、先祖さまのおまつりには必ず出て、近くに感じることで、のちに自分の在り方に気づくようにしている」「肉親のお見舞いや葬儀にもつれて行く」である。

このように保護者は、生命の有限性や死の不可逆性を教えながら死について説明したり、死にま

つわる感情や死に対する姿勢を自ら見せることにより、子どもに死とはどのようなものかを言葉や態度で教えようとしていた。

7) 自然との触れ合いを大切にす

保護者は、〈自然と触れ合う体験をさせる〉〈動植物の飼育を楽しむ〉ことにより、〈自然との触れ合いを大切にす〉関わりをしていた。

例えば「昔は近所で、犬や猫や鳥を飼っている家庭がたくさんあったが、最近ではあまり見かけないように思う。動物、植物と出来るだけ関わることが出来るように、散歩をしたり、畑仕事をする時は畑につれていったりということをしている」「虫がいれば手にとって見せたり、花が咲けばいっしょにきれいねと話したり、その時々を自然を感じられるよう声をかけている」「自然と触れあう機会を出来るだけ持ち、その中で動物などの死を体験することで、生命の大切さについてその都度いろいろな話をするようにしている」「草花を育てて、土、水、太陽それぞれとても必要なことだと。四季おりおり庭で咲く花や、実をつけたイチゴなど、そのときの喜びを感じさせようとしている」などである。

このように保護者は、昔に比べ動植物との触れ合う機会が減少している現在の環境を考慮し、出来るだけ子どもが自然と触れ合える体験ができ、その中で生命や死を子どもが体験できるよう機会をつくろうとしていた。

8) 危険回避を教える

保護者は、〈事故の危険性を説明する〉〈事故から子どもを守る姿勢を見せる〉〈交通事故でどんな思いをするかを話す〉ことにより、〈危険回避を教える〉関わりをしていた。

例えば、「家の中で不慮の事故（風呂場、ガス、火事（たばこなど）、階段、危険物）を認識してもらい、大人が気をつけているが、どうして危ないかわかりやすく説明し、納得してもらおう」「とりあえず『シートベルトの着用』から教えている。今、上の子どもはジュニアシートなので、着用前によく『事故してしまった時、これをちゃんとし

ていないと大変なけがをしたり、死んで、パパにもママにも会えなくなる。そうなったらパパもママも悲しくて毎日泣くよ」と、もしもの状況と感情を伝えた。「車社会にどっぷりつかって生活しているので、見かけるルールを守らない大人達を見て、事故が起きたらどうなるのか、自分がケガするだけでなく、相手も傷つけること、傷ついた人の家族も悲しい思いをすること、周囲皆が悲しかったり、迷惑したりすることを考えさせるように話をし、ルールを守る大切さも考えるよう努力している」などである。

このように保護者は、危険なことを説明したり事故から子どもを守る姿勢を見せ、ルールを守ることの大切さを教えることにより、子どもが自分自身の身を守ること、他者に迷惑をかけないことの大切さを伝え、生命を大切に育てようとしていた。

V. 考 察

幼児の保護者は、核家族化の進む中、子どもが内面的に成長していくための環境を可能な限り作りながら、《思いやりの心を育て(る)》、《生命について教える》機会を持つとうとしていた。しかし、保護者は《子どもを取り巻く環境》の悪化を憂い、感情や行動のコントロールが利かない《子どもの言動へのとまどい》を感じ、《生命の大切さを伝えることの困難さ》を感じていた。ここでは、本研究結果について、まず、生命を大切に育てる心について、保護者が捉えた現状について述べる。次に、保護者に対して、看護者はどのような支援ができるのかについて考察する。

1. 保護者の捉えた生命を大切に育てる子どもの心の育ち

保護者は、現代の子どもを他者との関係性や、子どもの落ち着き、感情を相手に伝えることに関しては、昔も今も変わらないと感じていた。しかし一方で、突然大声や奇声をあげたり、暴力をふるい出したら止まらないなど、感情のコントロー

ルが出来ない子どもが増えたとも感じていた。現代の子どもは、栄養状態が良くなり、体格もよくなってきたが、一方で、子どもの心身症が低年齢化し、キレやすい、拒食症、不登校などの症状が小学校5年生くらいに多く見られるようになった。さらに幼い子も精神科を受診するようになり、専門的な治療を必要とする場合も少なくないと言われている¹⁰⁾。十代の子どもの問題行動として、他者との関係を確立できず「キレル」「一人を好む」などがあるが、その原因として、食事や睡眠、生活リズムの乱れなどが挙げられている。幼児(1~3歳)の保護者の79.2%は、食事の栄養バランスに最も気をつけている。しかし、子どもへ与える食事への自信については、70.8%の母親が「自信がない」と答え、同じような献立になってしまうことや、栄養バランスが取りにくいことなどに苦慮しているという調査結果もある¹¹⁾。睡眠については大人の生活時間が夜型になっていることに影響を受け、子どもの睡眠を取る時間帯が通常より数時間も遅れ、子どもの活動意欲の減退や身体的な不定愁訴、家庭内暴力など子どもの問題行動との関連が報告されている¹²⁾。乳幼児期の育て方がその時期の子どもに影響を与えるだけでなく、それ以降の生活をより健康的に過ごすということに影響を及ぼすので、乳幼児期からの望ましい生活習慣の確立は重要である。

環境に関しても、必ずしも子ども同士が関わる環境があるとは言えず、子どもは一人であることや、大人といることが多いという結果であった。子どもを育てる環境としては、子どもが内面的に成長できる環境があると捉えていたが、一方では、保護者は《テレビ・ゲームからの悪影響》が子どもの身近にあり、保護者が真剣にいけないことだと教える犯罪が架空の世界で繰り返されることによって《現実と架空の区別の困難さ》があり、子どもが「テレビの世界に入り込む」ことに怖さを感じ、「暴力的な態度を示す」、「小動物へ殺生をする」など、親には理解できない子どもの行動があるということが明らかになった。テレビやゲー

ム、いじめ、塾など子どもを取り巻く社会環境も子どもの問題行動の要因として挙げられている¹³⁾。児童の生命観の発達には動植物の飼育など生死に触れ合う体験が影響すると言われていた¹⁴⁾。幼児期においては、擬人化的生命観として生命観の芽生えが起こる時期である。また、思いやり行動が芽生えてくる時期でもあり、自然という生命力の豊かな環境に触れ合うことは、子どもの心を育てる上で重要である。子どもを取り巻く自然・社会環境は、子どもの生命観の育ちに影響を与え、生命に接する機会を持つことや生命の大切さを感じ、考える機会の重要性を示唆している。

2. 保護者への看護者の支援

保護者は“生命を大切にする子どもの心”を育てるために、様々なアプローチを駆使していた。しかしその中で、〈説明の仕方がわからない〉、〈説明しても伝わらない〉などの困難感も抱いていた。我々看護者は、人の生命に関わる職業に携わっており、この問題に関して、子どもや保護者に果たすべき役割も大きいと考える。病院など施設での誕生や死が多くを占める今日、生命の始まり（誕生）や終わり（死）の場での関わりは重要であろう。例えば、子どもの誕生の場においては、同胞が自分の弟・妹の誕生がとても嬉しいことであること、すばらしいことであることを子どもの認知の発達に合わせながら伝え、同胞と触れ合う機会を意図的に設けることなどの関わりも可能であろう。また、幼児への Death Education として、状況を判断し、臨終の場に子どもが立ち会うことも支援できるであろう¹⁵⁾。看護者は、施設における祖父母などの親しい家族の死の場面で、子どもがきちんとお別れできるようにセッティングしたり、そのような場を設けることができるような保護者への働きかけも時には必要であるのかもしれない。その場合、保護者に対してそのような関わりがなぜ大切なのかの説明も必要であろう。

小児看護に携わる看護者は、他児の死に直面し

た子どもへの関わりも大切になってくる。他児の死に直面した幼児期の子どもは、亡くなった子どもの部屋をのぞきに行ったり、周囲にいる看護者の表情を見たり、ついて回ったりしながら、何が起きているのかを知ろうとしている行動がみられる。子どもはひとり取り残された感じになり、夜になれば不安を感じたり、様々な思いを巡らしている。このような場合、できる限り子どもがしてほしいこと、求めていることを行うことが必要である¹⁶⁾。それと同時に、我々は子どもの生命観の育みという視点から、そのような場面に遭遇したときに、どのような関わりが可能であるのかについて考えていくことが今後の課題となろう。

また、地域においては、助産師による小中学校への出前授業などの取り組みが報告されている¹⁷⁾。しかし、生命を大切にすることを考えるうえで重要である向社会的行動が、学童期から急速に発達してくることを考えると、幼児期からのある程度の取り組みも重要であろう。例えば、生命の始まり（誕生）や終わり（死）に関して、専門職としての立場から看護職が保育園や幼稚園に向き、直接子どもに関わっていくことも必要なのではないだろうか。同時に保護者に対しても、生命の始まり（誕生）や終わり（死）を子どもが体験できるように関わることの大切さや、具体的な関わり方を伝えたり、関わる上で保護者が困難に思っている事について相談にのるという役割も担うことが必要であろう。今後の課題として、子どもや保護者に対する看護専門職ならではの具体的なアプローチ論の開発が望まれる。

VI. 謝 辞

研究にあたり、調査に協力してくださいました保護者の皆様に深謝いたします。また、本研究は平成11・12・13年度科学研究費補助金の助成により行いました。

参考・引用文献

- 1) 警察庁：犯罪統計書 平成20年の
[http://www.npa.go.jp/toukei/keiji37/h20hanzaitouk
ei.htm](http://www.npa.go.jp/toukei/keiji37/h20hanzaitouk
ei.htm) (2009/10/22)
- 2) 警察庁生活安全局生活安全企画課：平成20年
中における自殺の概要資料 [http://www.
npa.go.jp/safetylife/seianki81/210514_H20
jisatsunogaiyou.pdf](http://www.
npa.go.jp/safetylife/seianki81/210514_H20
jisatsunogaiyou.pdf) # search= '平成20年 自
殺' (2009/10/22)
- 3) 佐藤比登美, 齋藤小雪：現代子どもの死の意
識に関する研究, 小児保健研究, 58(4), 515-526,
1999.
- 4) 原野広太郎, 小嶋秀夫, 宮本美紗子他編集：
児童心理学の進歩1985年版, 219-246, 平井誠
也, 浜崎隆司, 第9章向社会的行動, 金子書房,
1985.
- 5) 祐宗省三：幼児期における愛他的行動(一),
児童心理37(10月号), 1920-1922, 1983.
- 6) 祐宗省三：幼児期における愛他的行動(二),
児童心理37(11月号), 2092-2105, 1983.
- 7) 祐宗省三：幼児期における愛他的行動(三),
児童心理37(12月号), 2279-2294, 1983.
- 8) 菊池章夫：向社会的行動の発達, 教育心理学
年報, 第23集, 118-127, 1983.
- 9) 大日向雅美：家族の揺らぎと親の惑い, 小児
保健研究, 58(2), 155-159, 1999.
- 10) 社会法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭
総合研究所編：益巴千草：心身を育成する保
健・医療, 日本子ども資料年鑑2009, 22-23,
KTC 中央出版.
- 11) 前掲 10) 堤ちはる, V. 栄養・食生活,
163-170.
- 12) 前掲 10) 齋藤幸子, IX. 子どもの生活・文
化・意識と行動, 301-309.
- 13) 前掲 10) 児玉夕香, X. 子どもの行動問題,
331-357.
- 14) 多田納育子：児童の生命観の発達に関する研
究, 生物教育, 32(4), 253-261, 1992
- 15) アルフォンス・デーケン編集：死を教える,
64-82, 宮本裕子, 第二章 死への準備教育の
場とそのあり方 幼児教育と両親の役割, メチ
カルフレンド社, 1997
- 16) 山村美枝：他児の死に直面した子どもへのか
かわり, 小児看護, 21(11), 1484-1487, 1998
- 17) 朝日新聞(平成13年10月2日付け), 月刊子
ども論, 16(1), 37, 2001
- 18) 筒井真優美：入院している子どもどうしのか
かわり, 小児看護における技, 南江堂, 2003.
- 19) 楠凡之：今日のいじめの問題とその構造, こ
ども白書2007, 58-61, 2007.
- 20) 西田 篤：「叱ること」から「育てること」
へ, こころの科学 No.142, 62-69, 2008.
- 21) 岡田隆介：第3章現代社会と子ども 2. 臨床
からみたいじめ, 臨床精神医学36(5), 649-651,
2007.
- 22) 針間博彦：いのちの教育, こころの科学
No.146, 123-130, 2009.
- 23) 小浜逸郎：「子育て」の本質, そだちの科学
No.10, 107-111, 2008.
- 24) 山田真理子：地域の子育て力は, いま, そだ
ちの科学 No.10, 71-74, 2008.
- 25) 大日向雅美：育児論というストレス, そだち
の科学 No.10, 75-79, 2008.
- 26) 中村 敬：育児不安軽減に向けた取り組み,
小児保健研究63(2), 118-126, 2004.